

—・学校で学ぶ ・家庭で生きる ・地域で創る これが上鷲宮 —



上鷲宮

「自然といのちを守る学校」

<http://nk-kamisagi-e.a.la9.jp/>

開校39年
No.436
平成29年度

学校だより 1月号

中野区立上鷲宮小学校
校長 堀 聡明
Tel 3926-6381

今年もおだやかに

校長 堀 聡明

明けましておめでとうございます。今年のお正月は穏やかな日と夜にはスーパームーンを見ることができました。さまざまな教育活動の中で子ども自身がめあてをもち、達成できるように教職員一同、職務に励んでいきます。後期後半もよろしくお祈りします。

スーパームーンを見ながら、ある新聞記事を思い出しました。その記事によると、宇宙飛行士には、気立ての良さそうな人が多いそうです。歴代の日本人を思い浮かべても、少なくともカメラの前では上機嫌だったようです。宇宙滞在連続167日の「日本記録」を土産に、国際宇宙ステーションから戻った古川聡さんも笑みを絶やさなかったのは、皆さんの記憶にも新しいのではないのでしょうか。降りたカザフスタンの雪原は零下20度。無重力で弱った筋肉を椅子に支えられての、まん丸の笑顔でした。初の宇宙でお疲れだろうに、記者の質問にも律義に、飾らない答えが返ってきました。「重力を本当に感じます。重力のお陰で座れますから」「冷たくて新鮮な空気。息ができる空気が周りにたくさんあるのは素晴らしい」。医師の古川さんは、宇宙暮らしの影響など体を張って調べました。交代要員の遅れで、野口聡一さんの記録163日を抜くことになりましたが、その野口さ

んがこれまたニコニコ顔で出迎えたことが強く印象に残っています。山崎直子さんは、帰還後の著書『夢をつなぐ』（角川書店）に「どんなに悲惨な災害が人々を襲おうとも、飢餓や貧困、差別や格差が厳然としてあろうとも、それでも生きている世界は美しい」と書いてありました。飛行士たちが日本語で伝える天空体験の数々は、地球と人間の尊さ、いとおしさを語ってくれます。「好人物」に備わる優しさの何割かは、どうやら宇宙から持ち帰ったものかもしれません。記憶をたどりながらご紹介しました。

上鷲宮小の子どもたちの中で宇宙飛行士になる子がいるかどうかは、期待をするところですが、今日の朝会で「穏やかな心をもつ子」の話をしました。そのために、自分からあいさつをし、やさしい言葉で人に接するようにしようと伝えました。その中で、いい体験や経験をしてほしいともいいました。きれいに整列をする子どもたちの目に、「ことしものがんばろう」という気持ちが表れていました。

12月にお祈りしました学校教育に関するアンケートへのご協力ありがとうございました。現在集計中です。結果は学校便りでお知らせし、これからの上鷲宮小学校の教育活動に生かしてまいります。

1月の生活目標 寒さに負けない体をつくろう